to My Dear Family

with Love and Gratitude

ふかいふかい　森をぬけて　おおきくひらけた　海のけしき。

とがった陸地の　そのさきに　ぽつねんと立つ　灯台がある。

だんだん　近づいてゆくと　ちいさく見えた灯台も

　ずんずん　おおきくなっていき　どっしり高くそびえ立つ

ぎぎいと　とびらがあいた

中からでてきた　おじいさん
にっこり笑って　こういった

おや、おじょうさん　よくきたね
かもめと　つばめの　お客しか
さいきんは　とんと来なかった

さあ、おはいり

ぐるぐる　長いかいだんを
つきあたりまで　のぼっていく

あたまの上には　丸いとびら

よいしょ、ととびらを押しあけて
おじいさんはこう言った

ようこそ　わが家へ　おじょうさん

おへやの中は　ケーキをやいた　いいにおい

お茶とケーキは　いかがかな

どっこいしょ、と　おじいさんは　いすに　こしかけた

おや、　ふしぎそうな顔を　しているね
そうか、まだ　わしがだれか　わからないんだね

わしは　灯台守というものでね
ずっとここに　すんでいるんだ

ここで　なにをしているかというとね

ううむ、すこし　待っておくれ

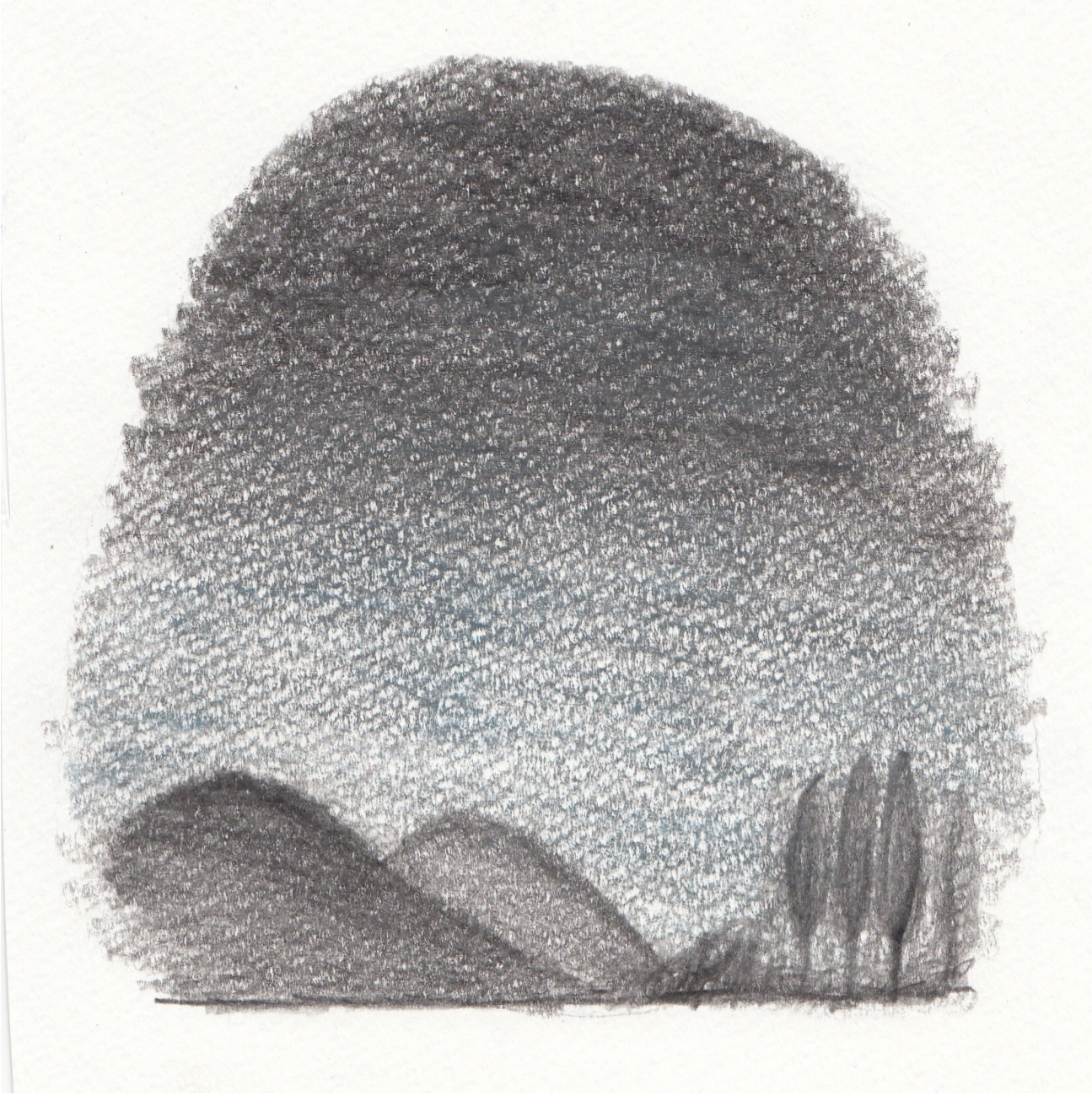
せっかくだから　そのまえに
ひとつおはなしをしよう

たいようとつきの　おはなしを

たいようとつきは　仲のいい　おやこです

むかしは　たいようとつきは
おひるに　いっしょに　空にでて
ゆうがたになると　いっしょに家に　かえっていました

ところが　たいようとつきが　いっしょに　家にかえってしまうと
よるの空は　ほしたちしか　いませんでしたので
今よりも　ずっと暗かったのです



まっくらだと　家へのかえりみちが　わからなくなったり
石ころや　切りかぶに　つまずいたりしましたので
みんなとても　困っていました

そこである日　一羽のはやぶさが
たいようとつきのところへ　おねがいにいきました

空たかくたかく　はやぶさは　とびました

たいようとつきの
ところへついた
はやぶさは
こう言いました

たいようさん、
あなたたちが
かえってしまうので
よるになると　とても暗くて　みんな　困っているのです
だから　どうか　つきさんには　よるを　照らしてほしいのです

それをきいて　たいようは　おどろいて言いました

なんですって　つきはまだ　ちいさくて
ひとりで　暗いよるを　照らすなんて　きっとさびしいに　きまってる
そんなことは　させられないわ

それでも　はやぶさは　言いました
よるがまっくらだと　みんな　家へかえれません
石や切りかぶに　つまずいて　けがをするものも　いるのです

それをきくと　たいようは　かんがえこんでしまいました

そこで　おじいさんは　ぱたりと　はなすのをやめた

それから　たいようが　どうしたか
それは　ちょうどこれから　見えるんだ
おいで

たいようは　ながく　なやんだあと
つきが　よるを照らすことを　承知しました

そして　夕暮れどき　つきを家から　おくりだすときに
つきが　さむく思わぬよう　さびしくならぬよう

せいいっぱい　あたたかく　うつくしく
かがやくように　きめたのです

それから　たいようは　はやぶさに　ひとつおねがいをしました

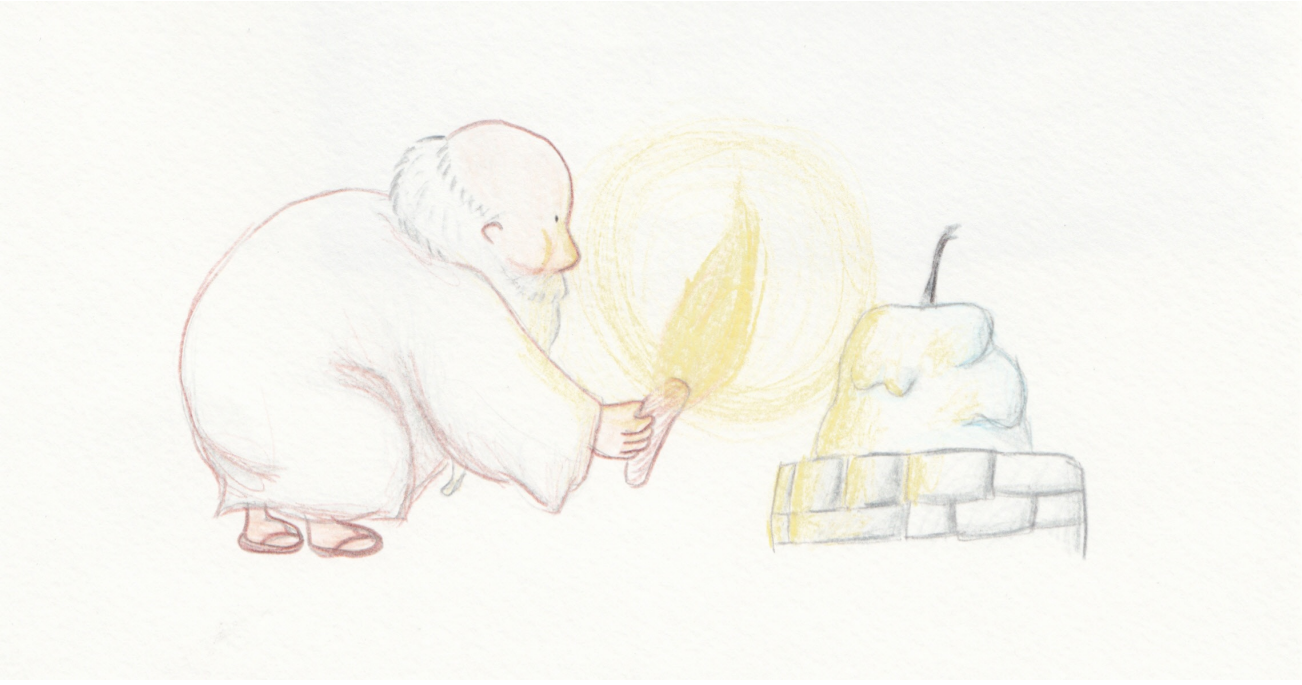
よるになると　どうぶつたちや　木々たちは
ほとんどねむってしまいます
ふくろうは　狩りに　でかけてしまうし
ほしたちは　あまりにとおくにいるので　おしゃべりできません

どうか　よるのあいだ　つきのはなしあいてに
なってくれるひとが　ほしいのです

はやぶさは
空から　かえると
ともだちの
おじいさんに
そうだんしました

おじいさんは　じぶんがつきの　はなしあいてになろう
と言いました

そこで　おじいさんは
つきに　すこしでも　ちかいよう
たかい　塔をつくり



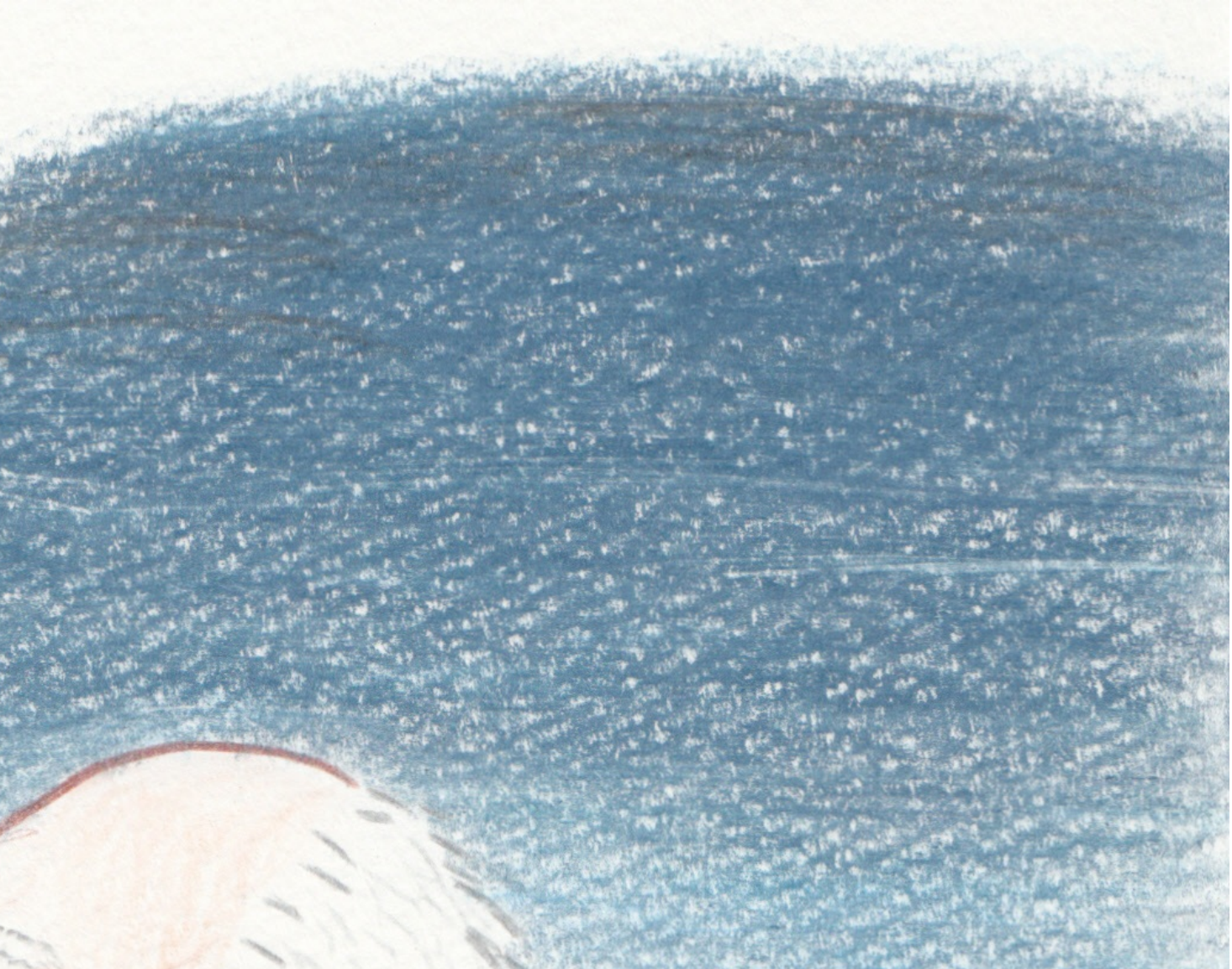
つきが　すこしでも　見つけやすいよう
あかるいひかりを　ともし

そうして　まいばん　空を見上げ
つきと　おはなしをしました

ひんやりと　海のかぜがふいた
おじいさんは　とおく　海のほうを　見ていた

このおはなしのおじいさんというのは
わしの　ひいひいじいさんなんだ
わしの　しごとも
ひいひいじいさんと　かわらない

ごらん



ふりかえると　ガラスのへやのなかに　おおきな　でんきゅうがひとつ

そのとき　でんきゅうが　ぱああっと　かがやきはじめた

あかるい　あたたかいひかりが　日の暮れた空を
とおく　とおく　つきぬける

つきが　ほほえんだ
今日は　なにを　はなしましょう

さあて、おはなしは　これでおしまい
あなたは　かえらなくっちゃ　おじょうさん

ほら、きこえるだろう
おかあさんが　よぶこえが

ゆっくりおやすみ　おじょうさん